



BECHSTEIN KLAVIERSCHULE

ピアノ教育の現場から——

ベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、音楽をより深く理解するピアノ教育を実践している内藤晃先生と石本育子先生のお二人による「ベヒシュタイン シューレ誌上特別レッスン」。4回連載の総集編となる今回は「ピアノでオーケストラを」をテーマにお届けします。

BECHSTEIN Column



ベヒシュタインの王冠

「箔をつける」という表現が日本語にあり、賞禄が増すとか高い値打ちがつく、評価が高まるといった意味で使われます。ドイツ語でこれをどう言うのかを辞書で調べてみたら、「krönen」=「王冠を戴かせる」と出ていました。

「王冠」が、ベヒシュタインのロゴマークにここ十数年来採用されています。その前からもコンサートグランドのサイドやカタログには不定期に付いてはいましたが、楽器の鍵盤蓋や棚板正面などにしっかりと定着したのは2005年頃からだだったように記憶しています。当初は何か取って付けた感じで、王冠の無いすっきりした「C.BECHSTEIN」がカッコいいなと思っていましたが、逆に今は無いとしっくりこない。王冠をトップにしてロゴが二等辺三角形となり、マークとしての座りというイメージもいい。

「王冠を戴かせる」=「箔をつける」で楽器自体の本質的なものが変わるわけではないのですが、受けるイメージは確実に変わった(と思う)。ベヒシュタインは1853年の創業以来、プロイセン王国や英国、ロシア、その他の王室や貴族の御用達(Hoflieferant)として、またリストやドビュッシーをはじめとするピアニストや作曲家らに楽器を弾いてもらい評価、愛用されてきました。それらをイメージさせる王冠をロゴマークに組み入れることによって正統な、高貴な、選ばれし楽器であると一般に認識してもらう。そしてそれに見合う、値する楽器である、と自分も日々感じ、そして信じていくために何ができるかと考えています。

ベヒシュタイン・ジャパン
調律師 尾山 格

ハンマーの打弦をイメージする。



内藤 晃
(ピアニスト)



石本 育子
(たかまつ楽器ピアノ講師)



加藤 正人
(ベヒシュタイン・ジャパン代表)

石本: たかまつ楽器ではこの時期青い鳥コンペティションが近づき生徒さんたちはとても頑張っています。

特に連弾部門に出場の皆さんは日頃一人で弾いているので、よいアンサンブルを目指すために苦労しているようです。

やはりまずは

- ① 2人で表現する全体像を理解すること
- ② オーケストラ曲のピアノ版の場合は如何にそこを表現できるかが鍵となることですね。

内藤: ただ、どんなタッチで弾いてもピアノの音色はピアノで、ヴァイオリンやクラリネットの音色が実際に出るわけじゃありませんから、どのようにオーケストラのような響きの錯覚を作り出すかということになります。

石本: 聴き手にそう「錯覚」してもらうんですね。それは内藤先生の書かれたベヒシュタインジャパンから出ている小冊子「ピアノでオーケストラを」にとても興味深く書かれていますね。

内藤: 僕は、オーケストレーションというのは絵画の遠近法みたいなものだと思っています。近くに聴こえる楽器と遠くに聴こえる楽器がある。それを、くっきりしたタッチと淡いタッチの使い分けで描き分けていきます。

石本: はい、単に「強弱」の差というだけでは、描ききれない表現があって、それに答え得る楽器と演奏者の工夫が必要だと思います。

内藤: この「淡いタッチ」というのが曲者で。鍵盤部分の雑音成分が出ないように弾くわけですが、慣れるまでなかなか難しいようです。そして、タッチのコントラストによる遠近感、オーケストラの曲に限らず、どんな曲を弾くのにも最も大事なようになってくるテクニックのひとつですね。



内藤 晃
(ないとう あきら)

ピアニスト、指揮者、作曲家。東京外国語大学ドイツ語専攻卒業。在学中よりピアニストとして演奏活動を始め、桐朋学園大学指揮教室、ヤルヴィ・アカデミー(エストニア)などで指揮の研鑽も積む。弾き振りを含む多彩な演奏活動とともに、「もっと深い音楽体験」を共有すべく、ユニークな発想でレクチャーや執筆を行う。月刊音楽現代に「名曲の向こう側」を連載、訳書にA.ゲレリヒ著「師としてのリスト」(近刊、音楽之友社)、校訂楽譜に「ジョン・アイアランド ピアノ曲集」「13人の女性によるピアノ小品集」(カワイ出版)などがあるほか、音楽雑誌やCDライナーノートの執筆も多い。札幌シンフォニエッタ、アピアント交響楽団、杉並グース合奏団などを指揮。2014年、全日本ピアノ指導者協会から新人指導者賞受賞。一次資料から作曲家の美意識を読み解く独自のレッスンを各地で好評を得ている。CDに「Primavera」(レコード芸術特選盤)「言葉のない歌曲」(同準特選盤)などがあるほか、マリンバ吉川雅夫氏や作曲家春畑セロリ氏のCDでピアノを務め、一流ソリストや作曲家からも厚い信頼を寄せられている。主宰ユニット「おんがくしつトリオ」では教育楽器によるエキサイティングなアレンジが人気を博し、全国各地に招かれている。
www.akira-naito.com



石本 育子
(いしもと いくこ)

静岡県浜松市出身。信愛学園高等学校音楽科を経て武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科卒業。古屋豊、川内澄江の各氏に師事。東京・浜松・香川において数多くのコンサートに出演するだけでなく、自主企画の演奏会を立案運営。独自の指導法による連続講座をピアニスト内藤晃氏と共に汐留ベヒシュタインサロンにて開催。たかまつ楽器青い鳥音楽教室主事。青い鳥マスタークラス主任講師。四国二期会会員。全日本ジュニアクラシック音楽コンクール及び東京国際ピアノコンクール審査員。



加藤 正人
(かとう まさと)

ドイツピアノ製作マイスター称号を取得
現在ベヒシュタイン・ジャパン代表取締役社長

石本: はい。

淡いタッチを感覚として意識するために、内藤先生がいつもおっしゃっている①
戻ろうとする鍵盤の動きを指先で感ずることや②「指や腕をどうする?」ではなく
ハンマーがどうやって弦を打つか?をイメージできることが大切ですね?

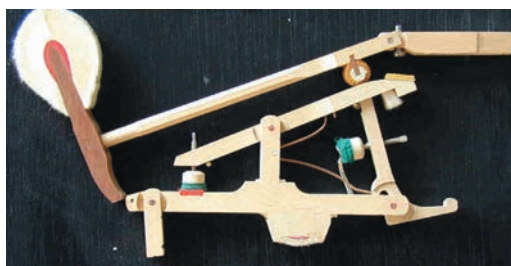
内藤: そうですね! 鍵盤の先についているハンマーの動きを指先で感じられることで、弦を直接爪弾いていくような感覚が生まれます。喩えるとすれば、ハンマーのついたアクションというまどろっこしい代物を使って、ハーブを遠隔で弾いてるような感じですかね。

加藤: 現代のグランドピアノは創業時にカール・ベヒシュタインが採用した「突き上げ式シングルエスケープメント」ではなく、エラールが発明した「ダブルエスケープメント」という連打に有利なアクションが一般的に使われます。当時使用されていたシングルエスケープメントは、連打性という意味では優位ではなかったのですが、鍵盤からハンマーまでの槌子の数が少ないので、鍵盤でハンマーの打弦の瞬間を感じ取ることが容易です。この点はショパンがエラールよりブレイエルを好んだ理由の一つになるのではないかと思います。
しかし、指先に神経を集中させれば、現代のダブルエスケープメントアクションでもハンマーの打弦の瞬間を感じ取ることができます。ハンマーの接弦時間を決める理想的な整音状態、また、アクションの調整が正確であるほど、その打弦の感触を掴みやすくなります。打弦タイミングを捉える指先の意識は演奏表現にとっても重要でしょう。強弱の微妙な変化、発声タイミング、止音タイミングのコントロールが抑揚感・音色作りの要になるはずです。

内藤: とりわけベヒシュタインでは、声部ごとにタッチを弾き分けるとそれらが塊にならず分かれて聴こえてくるので、生き生きとしたアンサンブルに聴こえて面白いですね!



ベヒシュタイン創業期のシングルエスケープメントアクション



現代のダブルエスケープメントアクション

内藤先生、石本先生がお感じになっているベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、
実際どのように生徒さんたちに音楽を理解させていらっしゃるのか、
誌上レッスンと動画をリンクして公開いたします。